

おわりに

服部 良久

「はじめに」で述べたように本研究会は、EUの発展と拡大を見据えた新しいヨーロッパ史を、「ヨーロッパ・アイデンティティ」というコンセプトにより模索してきた。アイデンティティとは多分にその存在の過去とその記憶に規定された意識であることを考えれば、歴史学におけるこのコンセプトの有効性はたしかなものであろう。紙数の制約により、各論の問題は十分に論じ尽くされたとは言えないが、研究会においては様々な新知見を共有することができた。これを逐一ここで確認することは控えるが、少なくとも、ヨーロッパ史におけるアイデンティティ形成が複合（多重）的かつ可変的であったこと、そうしたアイデンティティは同時代の歴史的状況（実態）とのダイナミックな相互関係にあり、また過去を解釈する歴史家の意識も自身と社会のアイデンティティと不可分の関係にあること、こうした認識を個別的な事例を通じて一層確かなものとすることができた。これを足場に新しいヨーロッパ史像を構築することが、次の課題となる。

なお本研究会は、2002年11月にシンポジウムを開催し、その成果はすでに谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』（山川出版社、2003年11月）として上梓されている。本報告書はその後の研究会活動の成果であり、この書物の続編としてお読み下されば幸いである。

また隔月の研究会では、事情により本報告書には寄稿していただかなかった研究会メンバーの井野瀬久美恵（甲南大学）、羽田正（東京大学）、川島昭夫（京都大学）、谷川稔（京都大学）、宮坂康寿（京都大学）、山口育人（京都大学）の諸氏も報告し、議論に参加してくださった。この場を借りて御礼申し上げたい。